

正宗白鳥

荷風氏の
反問について

荷風氏の反問について

私は、三月号の時評欄で、私が多年愛読している永井荷風氏の文学を批評した。僻陬へきすうの地において、原稿締切期日に迫られて、概括的の意見しか述べられず、私の所論の根拠となるべき章句を、氏の文集のうちから抄録することの出来なかつたのは遺憾であつた。しかし、私が荷風氏に対して抱いている感想の要点だけは列挙した訳で、それは概して荷風讚美に傾いていた。

ところが、四月号の『女性』を見ると、荷風氏は私の

所論について、憤怒を発したらしく、久し振りに弁護攻撃の筆を採っていられる。答えを促されているのだから答えなければなるまい。

一、氏は、私の文体が日常氏の目にする所のものとは、全く類を殊にせるを以て、その意を解するに苦しむものすくな鮮しとなさずといっているが、私の文章の典雅でも艶麗でもないかわり、平明で、晦かいじゆう渋の眼はないと自信している。三月号の荷風論の如き、論旨の当否は別として、私の文章の意味は、極めて分り易いと思っている。荷風氏にあれが解し難かったのは不思議だ。音読者の読み方

が悪かったのではあるまいか。あるいは、蜀山人や柳北など、前代の文士が現代に生れ変って、我々の文章を見たならば、異様に感じ、文意を解するに苦しむだろうと同様に、荷風氏も今日の雑誌文学を卑しんで旧文学ばかり耽読しているために、今日の平明な文章さえ分らなくなつたのではあるまいか。

一、私が、普通「九死一生」というべきところに、「十死一生」と用いているのを見て、氏は奇異の思いをなしたといっているが、私は数十年来執筆を続けて来た間に、「十死一生」の奇語を用いたのは、『安土の春』の信長

の台詞のうち一個所だけである。して見ると、私の作物を一度も読んだことのないといっている荷風氏も、あの戯曲だけは、雑誌の上で読まないまでも、少なくとも演舞場で見たに違いない。それとも、左団次を囲繞せる劇通諸氏から間接に聞いたのであろうか。……それはとにかく、信長記その他私の見た旧記には、今なら「九死一生」というべきところに、つねに「十死一生」という文字を用いている。「百死一生」と書いてあったのも一度目についた。私も奇異な思いをしたのだが、あの時代には一般にそういったのであろうと思って、わざと、その奇異

な語を用いた。それで、舞台上で左団次が忠実にそういつているのに、私は耳を留めたのであった。

一、「老女の扮粧に肖^にたり」という評語の意味が解らないといつて、古来慣用せられたる類語の例を挙げよと迫っている。また「形容の意に用いる成語には典拠なかるべからず……」といつている。私は和漢の故事に基くような曖昧な成語を用いた覚えはないので、三月号の中央公論を捜し出して披^{ひら}いて見ると、そこには、「豊^{ほうえん}艶の才華も色が褪^あせ香^{にお}いの薄^{おしろい}れたことを認めた」「昔の美人が皺の目立った顔に白粉を塗っているような感じ」と、

平明にいつているだけである。荷風氏がこれを勝手に荷風好みの漢文調に翻訳して、「老女の扮粧に肖たり」などと、古来の成語であるらしく見せかけて、その典拠を迫るのは無理である。「皺の目立った顔に白粉を塗った」という言葉の語源を明らかにせよ、古来の類語を挙げよという荷風氏の量見が私には分らない。かつまた、「出典の証すべきものなき形容」を用いてはいけないというならば、日本人のつくった漢詩の如く、生氣のない形容語ばかり用いなければならぬ。荷風氏自身の自然描写などに我々が感服するのは、在来の常套を脱した清新な

形容語などが用いられてあるためではあるまいか。

察するところ、荷風氏が私の評語の出所を明らかにせよといったのは、修辞の問題ではないので、「なぜおれの近作が、色が褪せ香いが薄れているか……皺が目立った顔に白粉を塗った感じがするか」という点にあるのであろう。……荷風氏の気に入らないあの批評は、氏がかつて『女性』誌上に連載した考証的文人伝に対して下されたもので、あの頃の雑誌を座右に備えていない私は、例証を引いて来ることが出来ないが、あれを一読した際に私の脳裡に印象された感じは、私が批評のうちで形容

したようなものであった。しかし、あの文人伝とても、それに多少の興味を寄せたればこそ読んだのである。読みながら、何となく昔の才華の衰えたような感じがしたのだ。そう感じるのは間違いだというならば、意見の別れるところで、いくら論じたって為方がない。……すでに文章を草して世に発表した上は、さまざまな批評を下されるのは、止むを得ないことで、甘言のみを耳にしようと思うのは虫がよすぎるのである。

私は、先ごろ森鷗外の『北条霞亭』ほうじょうかていを讀んで、この文章が老いてますます面白方面へ向っていたことに感

歎した。考証的伝記を私は一概に嫌っているのではない。鷗外は小説よりも、『澁江拙斎』『伊沢蘭軒』など老後の伝記物において、自家特異の文学を創造していたのであったが、『北条霞亭』はことに面白かった。数百通の手紙を根拠として、年代的にその一生を、ありのままに考察して描出した手際は、他の企て及ばざるところであった。霞亭は凡庸な一儒者であったが、鷗外の述作を読むと、当時の儒者の生活状態がよく分る上に、ある人間の一生が髣髴として眼前に浮んで来るのである。作者自身は説き尽していないに關らず、読後、人生について感

慨を起さされるところがある。……荷風氏は、花柳小説その他においては、鷗外とはちがった傑すぐれた文才を發揮しているのであるが、考証的伝記においては、まだ故人に及ばないことを私は見たのであった。

私は荷風氏が南畝なんぽの伝記を編むことそのことを非難したのではなかった。南畝の門弟、あるいは無名の狂歌師を題材として研究的伝記を製作しようとも、それは作者の自由であるのだ。英雄や文豪を伝記の材料にすること、私が特に好む訳がない、私の批評の言葉が足らなかつたために、このところ、荷風氏をして不可解な思いを

させたのであろうが、氏が平生私の作物を読んでいないために何でもなく解りにくく感ぜられたのだ。私は今駁論の筆を執っていても、そのために書きづらく思っている。……余計なおせっかいのようだが、荷風氏も私の書いた者を少しは読んだらよかろう。私の所論に対して反駁を加えるに当って、私の著作を少しでも読んでいたなら、お互いにトンチンカンなことを言い合ないで、都合がよかったのだった。

私が人に頼んで取り寄せた荷風氏の著作は全集の第二卷から第五卷までと、『麻布襪記』あざぶざつぎとである。それらの

書冊のうちには、『江戸芸術論』は収められていなかった。従って、氏の「狂歌論」はまだ一読の機を得ないのであるが、私とても、狂歌や川柳や落首などが江戸時代研究には、重要な資料であることはよく知っている。そのうちには、世相を巧みに諷刺したり人情の機微を穿^{うが}つたりしたもの少なくないことをよく知っている。私の曾祖父は狂歌に凝って六樹園の門に入り、江戸へも遊学したことがあるくらいで、私は幼時から、郷家に蔵している幾多の蜀山人の短冊や扇面^{たんざく}を見馴れている。しかし、私は蜀山人などは、古今東西の文学者の中に置いて、甚

だ詰まらない文人の一人であると思っっている。官命を帯びて長崎へ赴任した紀行文をかつて読んだことがあったが、決して傑れた紀行文ではなかった。先日は伊原青々園氏の『近世日本演劇史』を読んだ時、蜀山人が梅玉ばいぎよく歌右衛門を揶揄したりした狂歌を幾首か読んで、下らんことをいっていると思つた。諧謔かいぎやくとしても低級で、駄洒落以上の何物でもなかつた。それらの駄洒落に一樣の江戸の味があるのであるが、しかし、彼ら一派の製作を、どうして傑れた文学として認めることが出来ようぞ。そういつても、私は、シエークスピアとか近松とかいう

ような大文学を研究することを特別に尊ぶのではない。小文学の研究も甚だ面白いと思つてゐる。しかし、私が文集に現れたる荷風氏についてつねに不快を感じるのは、氏が南畝や柳北に対して過分な敬意を払い、現今の日本の新文学に対して侮蔑したらしい語氣を洩すことである。今日の文学だつて、南畝柳北輩に劣つてゐるものか。荷風氏が雑誌などを排斥し、現代文学について多く知るところのないらしいのに、漫然侮蔑の語を下すのはどういふものだろう。荷風氏が氏だけの特異の芸術を黙つて作つてゐるのは勝手だが、自分だけの趣味で他の文

学を律するのは偏狭である。「一人の僻見を以て妄みだりに他の広汎なる趣味を難ずる」ことを、氏は難じているが、氏自身の鑑賞の分野は果して広汎であろうか。

一、「足下そつかの如く江戸軟派について殆んど顧みるところなかりき」と、氏はいつているが、私は江戸軟派についてはかなり深く親しんでいるのである。幼少にして、枕屏風の張りませの扇面などで蜀山人や六樹園や真顔まがおの狂歌を覚えて以来、馬琴でも種彦でも春水でも、手当り次第に読んで育った私である。江戸文学は詰まらないと確信して、その臭気に染まないうようにと心掛けている今

でも、幼な馴染を懐しがると同様に、時々はそれらの旧い物に目を触れることがある。尾崎氏の『軟派雑考』だの、高野氏の研究物などにも興味を感じている。「詰まらないなあ」というその「詰まらなさ」の奥を知るためにも、我々は一生を費しても足りないくらいである。

三月号においてもすでにいつてある如く、荷風氏は柳北南畝以上の作家なのである。高所に立って彼らの詩文を評し彼らの生活を叙しているのである。

一、氏が列挙した幕臣の文人のうちでは、栗本鋤雲じょうんと成島柳北の詩文は、私も多少読んでいる。私塾にいた時

志賀重昂しげたか氏の『日本風景論』に掲げられた鋤雲の「題淵
 明先生灯下読書函」の「門巷もんこう蕭しょう 条じょう 夜色やしよく悲かなし ……白はく
はつのい しんそじをよむを 髮遺臣読楚辞」を讀んでロマンチックの空想を刺戟さ
 れたことがあつて、今でもその詩は暗記しているほどで
 ある。幕府の末路に興味を有っている荷風氏が、彼らの
 不遇の生涯や詩文によりて、そのロマンチックの空想を
 刺戟されるのに不思議はない。氏の傑れた述作の幾つか
 は、その刺戟によつて産れ出たのであろう。それで、私
 はそういう氏の作物を称讚しているのである。荷風氏の
 今度の論文の出ている『女性』四月号に一しよに出ている

る私の小品文『鳶の声』のなかにも、維新後時代の波に悩まされた田舎の小地主階級の運命を叙したところに、「永井荷風氏の傑れた筆によって趣味ありげに現されている江戸ツ子の老人と、運命においても気持においても同じことなのだ」と書き添えてあるのによっても知られるであろう。しかし、同情に価いするからといって、その時分の不運な小地主を傑れた人とする訳に行かないと同様に、柳北などの詩文を傑れたものとは、私には思えないのである。私は彼れが江戸から私の故郷近くまで行った時の紀行文や、京妓のことを書いたものや、『柳りゆう

『橋新誌』^{きょうしんし}などを読んで、当時の世相の一端を写したものととして、興味を覚えたが、それらは低級な座興的文学に過ぎないと思われた。時代の諷刺としても膚浅^{ふせん}に過ぎないではないか。この頃明治初期の文学が翻刻されて一部の興味を惹いているそうだが、それらは決して文学史上に光を放つものではないのだ。

一、最後に、氏は、「小山内薫君^よが足下の批評文を讀みたりしことを足下に語りしに、足下これに答へて、荷風は平生月刊雑誌を見ざる由を聞きたるを以て、かの批評を中央公論に公表したりと言はれたり」と、この点

を力説して、「怯懦卑屈きようだの甚しきもの」などと、頻りに罵声を放っているが、これは奇怪である。私は荷風氏の愛読者であつてもその門下生ではない。氏自身私とは、「遂に交りを訂するの榮を得ず」といつている如く、私と氏とは交友の間柄でもない。何の故に、氏の怒りに触れることを恐れて逡巡する必要があろうぞ。ましてあの批評は氏が独り極めに極めているような漫罵ではない。ところどころ語句に謹しみを欠いたところがあるにしても、推讚の辞句に富んだ真面目な批評である。

とにかく、中央公論ほどの雑誌に署名して、寄稿した

ものを、相手の目を忍んで蔭口を利いているように思われるのは奇怪である。荷風氏が読むか読まぬかは私の知ったことではない。月刊雑誌を手にしない作家は、批評圏外に置かなければならぬという理由はあるまい。

氏が小山内氏から聞いたような話があるにはあった。

演舞場で小山内氏と雑談をしていた時、氏が、「中央公論の批評は是非永井君に読ませてやろうと思つて、あつたので、」永井君は雑誌を読まんそうだからいい。あ

んなものは読まれん方がいい」といって、私は笑った。

舞台裏での一場の笑話である。日常の戯談口を捉えて、表立った問題として、瞋恚しんいのほむらを燃やすとは、蜀山人に傾倒している荷風氏にも似合ないことである。

仮りに、「あれはあなたのお目に掛けるようなものじゃないから、どうかお読みにならないようにして下さい」といったに對して、相手の男が威丈高いたけだかになって、「人に読まれぬような者をなぜ発表した？ 汝は芸術に不忠実だ。不真面目だ」と罵倒したら可笑おかしなものである。

人間は朝から晩まで、講堂や演壇に立ったような気持

で、一語一句いやしくもしないで口を利く訳には行かない。荷風氏のような人が多くなると、うっかり座興もいられない。

以上、永井荷風氏の反問に対して、残る隈なく答えたつもりである。文体は例の如く蕪雑であつても、思つてゐることはほぼいっただつもりである。

現代の傑れた芸術家の一人として氏に心服していることは、昨日も今日も変りはない。今後も氏の新作が現れたなら、必ず読むつもりだ。訪問を好まない私も、偏奇館へんきかんへは一度刺しを通じて、人事や芸術に関する主人の感想を

ユツクリ拝聴したいと、今でも思っている。(三月十七日、大磯にて)

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館